

禁猟区にて

*

*

和仁市太郎詩集

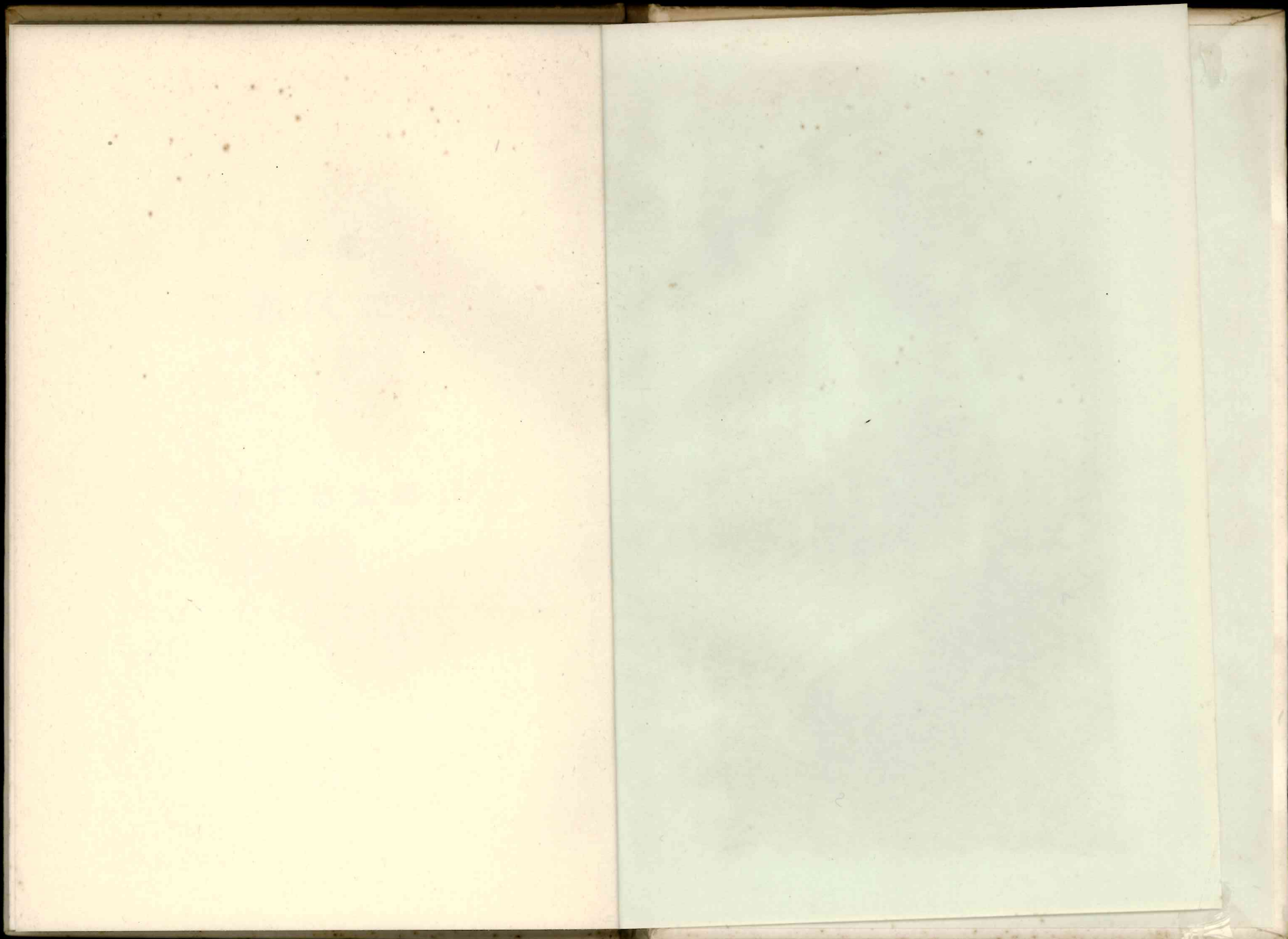
禁猟区にて

和仁市太郎詩集

謹呈

大野加半様

和仁市太郎

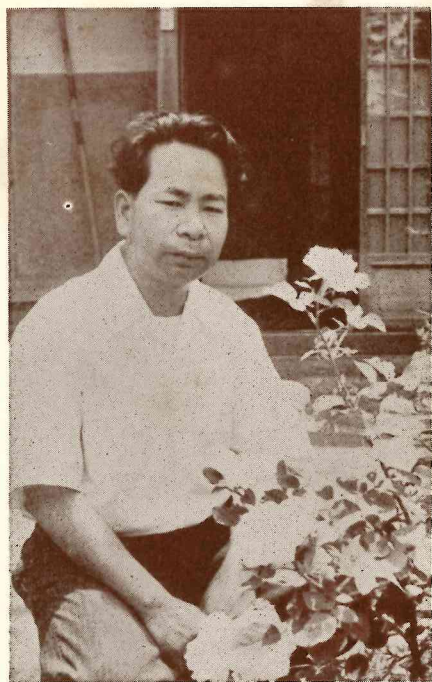


詩集
禁猟区にて

和仁市太郎

*

1958



三・七・二

於自宅前

攝影

堀滋美

詩集
禁猟区にて

私の詩

私の詩は米のような詩でありたい

玄米のごとく玄くても噛めば噛むほど味がでてあきることがない詩

その言葉は素朴であれ

その言葉は真実であれ

洋食もいい 中華料理も 時にパン食だっていいだろう

しかしあきることのない茶漬け御飯に漬物の味

私の詩は茶漬け御飯に代れ

私の詩は心の糧になれ

人びとの肝ッ玉をぎゅっと抱え暖かくその言葉を想い出させるよう
な 暗夜の灯のように何か生活の指針でも示すような 行きく
た旅人に旅寝の筵をひろげて一夜を故郷に帰ったように安堵を
与えるような 又息疲れて登る峻しい峠の頂上で憩んだとき谿底か
ら響く水音が心に沁みるような

私の詩はそんな詩でありたい

しかしそれははかない悲願であることか

よい言葉を創るために

よい詩心を培うために

私は私の生活を深く掘込もう

私は素直になって生きてゆこう

世の中が愈々けわしく厳しくなればなるほど

詩をつくる人間が必要になってくる

私の存在が必要になってくる

うぬぼれでなく今こそ誇りをもって

人びとの心に生きる力を与えるような

人びとの心をふるいたたせ根かぎりこの人生に闘えるような

そんな詩を私は生みだしたい。

不惑の言葉

昔のひとは巧いことをいったものである
四十くらがり――

肉眼の視力の減退についていった比喻だろうが
わたくしには文字通り先きがまっ暗で
人生の厚い壁に突きあたった感じである

四十年の年輪は小賢しく凡俗の慣いに育ててしまった
迷っているうちは向うみずに花園の蝶などに戯れていたが
夢の覚めた現実の才能に面とむかうと

掛値のない卒直な自分の力量が
こうもまっ暗な安定を与えている

模糊として迷っていた青春の日は花であった
郷愁がいつか敗北の旗をかかげ 詩が逃げてしまった。

童話

人びとがうすら寒い夜具にしばらく顔をうずめて

現実のせつなさに目を覆っているとき

酷寒の広漠たる荒野では素晴らしい奇術が拵げられていたのだ――

花咲爺は今も生きておられた

メルヘンの国から現実の世界に遊びに出られて

山飛驒の嶽々から高原をひょうひょうとおどけた姿で幻術を使い

灰を撒いて歩かれたのだ 姿もみせず

今朝起きて見ると葉の落ちた樹々といわず

電線の縞や軒下の蜘蛛の巣や常磐木の黒い葉にさえ

菌のように結晶の白い花を麗々しく咲かせ

万象は凍み氷り美しい花は咲き競った

夢幻の世界が此の世にあることを

枯木に咲かせて花咲爺は歩かれたのだ。

古い沼

匆忙の一日が終焉の幕をおろして

子供たちが寝てしまったあと

ラジオが最後の番組を終えて

お休みなさいと言ってぽつんと静寂があたりを襲うころ

妻と自分は見なれた顔を突合わせる。

古い沼にぽつんと沈んだ石の十五年、

まったく平穩のうちに過ぎてしまった。

不幸は自分ばかりと 人生の初発の日に願っていたのに

妻と呼ぶものを道連れにってしまった。

生殖だけは獣のように幾人もの血縁を作った。

係累は麻繩のように自分の肉深くガンジ搦みにしてしまった。

もはや愚痴を言い聞くことには気力も失せてしまった。

——あのまま東京にいたら少しは人に

名の知られた仕事もできませんでしたろうに、と、

慰め顔に言う妻の科白を

責められるように聞くが、

古い沼は底知れず沈黙して波紋も漂わせない。

東京にいようと、田舎にいようと、

遺賢は世に顕れるもの、他人は放って置くまい

壁に突きあたって返ってくる言葉は、

無能なる自己に対する不信である。

四十年

不逞の徒のように私にも一時代

自己の才を信ずる少年の時代があった。

私でなければ語れない権威ある言葉が

胸のなかにこんこんと湧きいで蔵されていると思った。

神は私にのみ恩寵ある言葉を遣わされ

素朴に私は予言者のようにほとばしる肉声を

白紙に述べた時代があった。

それが時日と共に生活の旗は破れカスが附着し

今日四十年の歳月の峠に空虚に立って

泥棒猫のようにきよろきよろと人の心をおしはかり

妻と成人しかけた子供たちの眼をかすめて

悪どいカストリ雑誌を読むまでに墮落してしまった。

夢は壊れ足もとほぐらぐらと私流の哲学は私を哄笑した。

演 技

この世の退屈に身の置き処のない人々が集ると、

羨望にところが狂って 邪よこしまな噂のなかに時間が空転される、

他人の境涯が理不尽に素晴らしく華麗に彩られる。

人びとは他人の、或は私の身辺に何か変事を待ちもうけている。

私の身の上に不吉なことが襲うのを！

私の事業が失地に塗れて脱落するのを！

私の生命が地上から消えて亡くなるのを！

百万人の視聴を集めた舞台上で奇術師の演技のように、

私は時に事業に失敗し離散しようと思ってみる、

私は時に自殺だって簡易にやってみせようと思う、

齷齪と人びとは傷つけあい夢幻の楼閣を人生に築こうとし、

頼み難い薄氷の現実には足枷を搦ませる。

白木蓮

あの日は雨が　いつしか曇にかわって
なますのような雪が　さむざむとした山峡の
まだ芽吹かない潤葉樹の上に降りそそいでいた
空洞になった私の心の隅へも自虐するように降っていた
二条の軌道はにぶい光りで道路を横断して
峡谷高く淀をなした流れに架かった橋脚は二本
白い脚を冷え冷えと逆さに投影していた
長い旅をゆく失意の人に似たうらぶれた心で
奇蹟を求める使徒の私が溪流に沿った道をゆく時

そそり立った高い絶壁の上に
馥郁と匂っているであろう真白い木蓮の花の
一本咲いているのを見つけたのだ
この世では及びもつかない遙かなる雲表に
化身のように木蓮は楚々と莊嚴に白く耀いていた
はるかそれを見上げている憧れの人も知らずに
木蓮の花は無限の智慧を撒いて曇ふるなかにほのぼのと咲いていた。

黄 蜂

二階から見る屋根の庇にぶらさがっている蜂の巣
自分たち夫婦に似て貧しく繁殖に余念のなかった黄蜂
春から夏にかけて営々と働き うむことを知らなかった蜂の家族
——幾組かの子蜂は巣立っていった 花園へ——

ある時は窓をあけて疲れた腫をそこに移すと
生きる日が何かせつないのであるうか 自分のごとく
巣にぶらさがってゆき惑い思案げの蜂に
元氣を出せよ と言つて力づけたい時もあった

今日棗のつぶら果が一つひとつ色づいて来て
南の窓にあまねく初秋の陽がかがよう時
引揚げてくる遙かな友の消息でも聞くように
窓をあけてそこを見あげると
既に飛立ってしまった蜂の空巣が
屈託なさそうにぶらさがっていた。

柿の樹の下で

梅雨が霽れてわかい柿の葉の
かさなりあつた緑の層を
木洩れ陽はすかしてふりそそぐ
妻は赤い洋傘と黒い洋傘を三本
安定感のある落下傘のように
小枝にぶらさげて乾すと
淡黄色の吊鐘の花瓣はほろほろと
ウェーヴの髪の毛のなかに落ちこみ
簪のように少女の昔に暫らく還らせる

この家に移り棲んで早や九年が過ぎた
想い出はいつも不安な日々を
こと足らぬ衣食に思うて齷齪と送迎したが
四人の子供はすくすくと巣立ちして
親のもとを去ろうとしている
古い感慨をこめて私達が見上げる二本の柿の樹に
年ごと吊鐘の花をともし数は増して
蝶や虻や蜂の群を甘く誘い
結実の秋を楽しませた
その幹は太く逞しく枝々は四方にはり
葉は階層ある緑蔭をその下に作っていた。

雑草の根

—又は喪失せる神

その時まだ神々は私の躰内に棲み
永遠なるものへの希望と憧憬は
緑草の生えた野のどこからともなく沁み出る泉のように
心と肉体にひたひたと溢れていた。

来る日の生活に度ましく

永遠に続く明日はきつと在ることを信じていた
満されない毎日であつても

明日のために心は静流となり奔湍となり

思わず掌をそつと臥床のなかで合わせる自分であつた

だがあの時を境に新しく回転しかけた心の歴史

過ぎ去りつつある古い因襲と感傷

私の心から喪失した諸々の神祕よ

神々よ 見果てぬ夢たちよ

あ 信じられるものは自分であり

自分の生の肉体であり

信仰も 栄耀も 詩業も 生活も

ぎりぎりの自分への強い鞭と

虐待から起る不逞な圧迫

ここから立上る不逞なる魂の彼奴
それは路傍の 雑草の毛根である
踏まれても 掻きとられてもなおも生きてゆく
ふてぶてしい雑草の根である。

(23.4.1.)

野 鴨

おとながふたりあわてて
落葉の散り敷いた道を音たてて走ってきた
このあたりに野鴨がおりたという
一緒になって枯れたささげ畑の蔓をわけ
犬のように匍いまわって探したが
遂に姿がみえなかった
おとな達は残念そうにぶつぶつ言って帰っていった。

(23.12.8.)

秋の日に

この秋初めて庭にモズが訪れ

松の木のでっぺんでかん高く秋を挨拶した

柿の実をあわてて速く朱さを加え

柿紅葉は一枚一枚葉を滑らかに耀かせ

傍らの錦木、楓が鮮やかに紅葉を粧った

狭いけれども豊かな色どりの庭に

神々は今日しずかに降り給うごとく

一日饗宴の集いがある下で展げられた

ここに移り棲んで十余年疾風のように春秋を迎え おくり

いつか老齡の座に行儀よくすわりかけた

私の肩に期待した妻や子どもたちの空しい希いは

秋風に吹かれる病葉のように散らばっていったが

私なりに僅かではあるが愛する人のなかのうのうと生きて

ことしも柿の木の下で一日を記録する俤せに支えられている。

夜 景

もう少しのところでおりる夜汽車ではあつたが
私を大勢のなかのつかれた旅行者のひとりのように
大きな汚れたリュックの間に小さく坐らせた
そういえば私の毎日が、長い旅をやっていたのだ
ひたすら喰うことの、のっぴきならなさに
意識のそとに自分を顧みようとはしない孤独の旅を――
やがて汽車は雪の積った山脈を越えようとしている
機関車はトンネルの勾配にさしかかり大きく迂廻する
汽笛も跡絶え、苦しまぎれの息づかい

心のなかで私もその車輪をおしあげている
部落の点々とした灯は窓から消えてゆく
私は私の灯をいつまでも追ってゆくのだ。

(23.2.25.)

千鳥

——或は「或る夜の独白」——

幾たびか経験ある人生の精神の起伏にまた踏み迷っている
ずるずると落ちこんだ懷疑の沼
不信なる寂寥の青い湖底

自分も来年は四十の齡になるとい
は・や・て・の・よ・う・に・過・ぎ・よ　時間　死魔よ
くだらない人間の独断と己惚れ

歡樂は何であつたか
誠実は何であつたか

まっすぐに捧げてきたこの一つの路は
再び人生の初発の日に還元された
嬰兒ではない　満身創痍に支離滅裂の精神　悪業の堆積

かかる夜の自虐の孤座に

千鳥　千鳥　川千鳥

なまじお前が千鳥であると知った夜から
私の心に寂寥が棲むようになった

妻よ　子供等よ

信じられる唯一のお前達が

死骸のようにより添って倒れ　まだ生きているのか
墓場に生きている私だけが――
私のために啼くのかピヨウピヨウと
哀愁をこめた餘韻を残して
闇の外に翔ぶのは姿も形も知らない千鳥であった。

(23.3.)

白蝶

晩霜が銀砂を撒いて紅葉の褪せた山々を彩った

ゆうべはどここの葉蔭で透きとおる翅を憩めたのか白い蝶が一つ

山を降りてくる白いものに追われ飄々と

葉の落ちつくし棘々した棗の木の上を泳いでいった。

孤独の座

夜おそくうらぶれて外出から帰って

電燈を低くおろした炬燵に足を伸ばすと、

自分の書齋ほど心の鎮まる処はない。

子供たちはもう寝て憩いの歌はせせらぎのように楽しそうだ。

おもむろに今日一日の――

又はここ数日の自分の心の抛りどころを

反芻して生きていることを確める。

繁忙の一日のほんの数十分、

この時刻 やつと魂は安住の座に戻ってきて

しばし人の世と詩とを思う時である。

ただ片鱗気にかかってくるのは、

背にした紅春慶の書棚から、

三冊ばかり貸出されて主人を忘れた書籍のことが、

暗雲を少し棚引かせるが、

それもしまいに自分の狭い量見に独り苦笑している。

こうした夜の更けた孤独の座に、

川千鳥の低く屋根を啼いて飛ぶのは、

人界を絶した境に置くのである。

春の日に

縷々とひねもす骨を削るように鑪面に向っている指に
鉄筆の胼^{かこ}胝は閱歴の道標のごとくなつかしい
私は世にもいみじい宝玉を撫でる手つきで
指頭に固い胼胝を感じながら街に出た
胸をはると心臓はすがすがしい呼吸で息づいてくる

今年も春はふかふかと慈愛に満ち自分たちをとりまいているのに
生活の掙へ駆りたてる酷烈な鞭は
幾年豊麗な春に背いて来たことか

夜来の雨が歇んで窪んだ路上に水が溜り
桜の花瓣が吹きよせられている
今日はなぜに山脈は遠く花曇りのなかに
その肌さえ見せずにはずかしく隠れているのだろう

春祭の鶏鬨楽の音が

餘韻を長くひいて遙か街の上で鳴っている。

惜春譜

「時」は今年もまたたくまに桜の季節をはこんできた
窓を開けている仕事部屋に花瓣は翻々と舞いこんでくる
近くの公園から酒に浮かれた人びとの
さんざめきの狂噪が仕事の手許を惑わせる

鑪の上の方眼原紙の函のなかに

蚕の種紙に卵を生みつけるように一字一字
身を刻むようにゆるがせにしない正確さで
文字を埋めている時

ふと二度と経ることのできない生涯の過半を通りこして
自分の進む道が他にあつたのではなかつたかとためらいがちに振り返る

私でなければ語ることのできない詩の言葉や
天より与えられたただ一つの自分を生かす仕事が
自分を待っていたように思えてならない
分身のように私の側で素直に身を減らしていった鑪や鉄筆のように
ただひとすじに子等を育てるために半生を磨り減らしてきた
日が一瞬の夢で過去った二十年を振り返ると
一瞬の夢で過去った二十年を振り返ると
思い出の一つも記さなかつた日記の空白のように 青春は
既に悔いに似たものを多く残して遠のいてしまった。
(26.10.1.)

薄暮抄

薄暮が生きもののように山岳の背を

するすると降りて仕事場に訪れる

瞳を遠く高く 暮れてゆく山々の

金色から濃紫金にかわるたたずまい

山裾の家々のともしびが一つひとつ明るさ増して

団欒のまどいが拵げられてゆく

読みがたくなつた原稿と乳色にぼやけ蠟びいた原紙

日記を埋める文字は空虚に平凡にしまわれたが

はらからの生活のために働き抜いた快い一日であった

このひと時真裸になつた私が私に還ってくる

幸福は我が家にも 意識した時満たされたものが

そこに待っている 妻や子供が夕餉の卓を囲んで――

人々の幸福を羨むことは止めよう

見失いかけた魂をいま一度高く おーいと

暮れてゆく山々に招んでみる。

夜の想い

わたくしがいつも追っているものがある
わたくしが絶えず追われているものがある

暗い夜を通いなれた川ぶちを歩いていた
子供たちが水にたわむれた夏の盛り場は
今は黄泉のようにしじまの底に沈み
人びとはもう憩らいの床に明日に生きる夢をみている
闇のなかに流れる水の音が耳朶を襲ってくる

残り少なくなった日記帳の空白に似て
私の人生を埋めるもろもろの記録は
悔みと虚しさに満たされてゆくであろう

はずかしいものだけが私をとりまき
残してゆくものはみんな恥ずかしいものばかり
暗くじっとたちつくす体を闇のなかに隠すが
心はざくろのように底まで掘りあかく炎をもやしている。

夜学

幼く父に死別して家がまずしく

高等小学にも中学にもゆけなかつた少年は

弁当を横に置いてかきこむように夕食を終ると夜学に出ていった

銀河のよく晴れた冬の谷底の町はきらきらに亡り

少年はなれた足どりで

長い橋を渡って古びた学校の鉄門をくぐつた

生徒ひとり先生ひとり

少年を宿直室につれてくると国漢の教師は

降りつんだ窓の雪明りに洋燈を点すと炬燵に向きあい

藤村の詩などを朗誦してくれたのであった

営みの日々は苦しくさいなんだが

明るい明日がいつも希みに駆りたてていた。

伝承

それはもう遠く 書きとめた日記すら
どこかの層屋の手で再生され
年代のみが束の間に過去ってしまい
胸を訪れる想い出も色あせてしまったが
鉄筆を握る拇指が痛く 揉みほぐしながら
休息をしばしばとる工房の隅で
ふいと心の底に灯のように浮かぶ心象が疲れを憩わせる
子供を背に 掌を子の腰に廻し
その夜も子供の請いに汽車を眺めに程近い駅を日課のように訪れた

日の暮れた暗い歩廊に汽車が着くと
客車の中から綿帽子を被ったまばゆい花嫁がおりたつた
紋服の男衆が定紋入りの圓い提灯にあかあかと灯りをつけて
やがて私達の前をよぎっていった

奥飛驒では古くから夜路を歩く時
妖怪と扮らわなため提灯に明りを點す風習が残っていた
粧った花嫁の華かさよりも
汽車から降りたつた真新しい提灯の煌々とした明るさが
眼底に焼付いて明滅する。

春雨感興

じつと心耳をすますと地底から音が聴える 言葉が聞える

ながい冬の固い雪塊を割り 地殻をゆさぶり

地表に押出そうとする春の呼び声が――

山飛驒の厚い氷を裂き 地熱が泉のように湧きあがり

縹渺と押寄せてくる春の意志が――

今 飛驒は目覚め世界の血みどろな都市に接続して

冬眠の窓が明るく開けられて息づいている

絹糸草のような暖かい雨が固い雪塊を叩いて降る――

やわらかく暖かい雨が慈母の息吹きのように

裏畑の消えた雪のなから豌豆の葉茎を洗い

やがて白い花瓣を焰のように點すであらう

既に初老の域に入って人生の苦澁を多くなめた私が

残された生涯に負托するもろもろの祈願は

所詮越しかたに変らない夢幻な心象ではあるが

今日昏れゆく霞んだ雪の山頂に瞳をおくり

縁側に佇っていると若やいだ希望に満ちた感慨が身うちを湧いてくる。

五月の夕

薄むらさきの藤の花房がたゆたゆとたれ

よべの雨に洗われて幽暗な気配にひとしお匂いが濃く

葉ずえからおちる水晶の玉が一滴ずつ

池のおもてに間歇な波紋を画かせる

ま・つ・や・か・え・で・あ・ら・ら・ぎ・す・ぎ・な・ど・が・新・芽・を・匂・わ・せ・て

さつきから鶴鴿が一羽白い羽根を信号手のようにふり

池のそばの菖蒲の葉のなかに姿を没した

人びとは集まると ビキニ環礁で試発された

水素爆弾の恐怖などを語りあえる日――

日ごろの險悪にのしかかる重くるしきから逃避して

緑の衣をふかぶかと被り一本の樹木となる

池畔にたつて水の声と樹木の心になる

久遠なる哲理に示頭された営みの正しさ

いつか死灰に肉体は跡かたなく亡び去っても

季節の推移に驚異の瞳を投げていよう

しばらく時間がわたくしより遠のくと

混沌とした精神が失われてゆき

純粹な嬰兒の自己をとりもどしてくる

緑くらしい庭園に孤独な園丁となつて大地の静寂を感じている。

禁獵区にて

怪我して病める手を頸から吊って

落葉の上にもうっすらと雪を白く刷毛で画いた路とも思えない山路を

登っていった

筆塚や菅公廟祀がおとのう人のない静寂のなかにたっていた

歩いていることだけが私の気分を憩ませ鎮静させ

ずきんと脈搏ち痛む苦役から解かれると

誰に忿りを向けることのない

自己への愚痴を反芻しながら――

冬空から射すにぶい陽が樹脂の漂う林の中に吸われていった

牛の背に似た瘦せ尖った頂上に立つと

老松に囲まれたはるか下手の開墾畑から

七、八羽の山鳥が安穩に群れ遊んでいたが蹺音に愕き

つと羽搏き灰色の羽根で雪を蹴り飛立った。

(30.2.11.)

玉蜀黍

階下で子供たちが玉蜀黍に醬油をつけて焼いている
二階の仕事部屋までかぐわしい匂いが少年の郷愁を運んでくる
颱風が通り過ぎ蟋蟀の奏でる夜は唄声が生きかえり
新涼がなにか思考するものを強制する

榉の木におそくまで蝸が夕暮を呼んでいた

父は病に長く寝ていたが

母はまだ若く故里の蟻川に臨んだ家の土間で

母は玉蜀黍の皮を一枚一枚丹念にはぎコンロの上に並べた

四十年は足はやく夢幻のように距たりをつくったが

少年の日がいつも水墨画のように臉のなかに生きている。

立春大吉

あの時も霏々と雪が降っていた
ふるいふるい昔のことなのに
あざやかに心象に残っている

けわしい生活につかれた時
ふつとところに応える母の思いやり
よみがえってくる母のころのうち

まずしく妻と初めて正月を迎えた春

遠く雪の峠をトラックで届いた小包の中に
故里のお寺で年頭に配ってきた

「立春大吉」と威勢のいい書体を木版で刷ったお札
そのまん中の朱印が美しく赤かった

たった一枚のお札だったが
そのうちに秘められた母の仕ぐさが
じんと胸に伝ってきた。

高山詩抄

一、城坂にて

黒い板塀が傾斜なりに四囲を遮っているが
城趾へつづく坂路を登ってゆくと
見晴らしは急に明るく開けてきて
薄暮の上にネオンが瞬きそめた家並と
山脈の上を遙かに加賀の白山が輝くように浮いている

覆いかぶさるアカシヤの白い花房の下

爪びく琴の音の洩れてくる道でしばし佇ち

古風な郷愁の中に忘れていた自己に対していた。

(27.6.21.)

二、神明通り

もはや長い間生活の厳しさに齟齬と通い慣れた道であった

賑やかな街をはずれて暗い道にかかると

子供の時の物におびえた不安に似て

提灯の明りが欲しかったように

この通りは沈々と静もり魔物は魅するように踊っている

暗さになれた瞳には野茨やうつぎの花群がほの白く

雨の止んだあとの若葉の息づくなかに貌のように咲きただよい

闇明の気配に去った昔を甦らせている

地はだを洗って流れる水の音が
生活の劇しさに汚れた耳朵を一瞬浄めてくれた。

三、枳形橋にて

水苔が屋根のうえで匂う古風なそんな町
石をおいた板葺きの家並がながく細く
川原町は流れに沿って続いている
往き来に慣れた通りであったが
雨が止めばやんだで情緒が纏綿と匂わしかった
ながい雨期にしつとり山脈の土塊深く水を含み
その肌と樹木の根と石ころを洗い地中に潜った雨を蒸溜し
宮川の水量を清く深く涼々とたぎらせ

このあたり瀬の音の強くなった河床を

若鮎の腹のような磨かれた小石が私語くように流れる

川岸の古い柳の枝は水面に垂れ逝く水に話しかける

南の空は広く高く拡がり紫紺に波をうたせた山脈を前景に

位山の頂きが少し覗かれる

青銅の擬宝珠の欄干の冷たい触感に

しばし厳しい生活から逃避して現実の貧しい自分を見出していた。

(30.6.4.)

四、上三之町附近

低い屋根を雪が重たく諦念を強うる筈のように堆め 一日ふつか

なおも霏々と緋の模様を織り 思惟の帷りを冷たくおろす

古い山の町の面影が墨絵のようにこのこるこのあたり 格子づくりの

昔ながらの碁盤目の通った町並 城山の濃い黒い杉と松の緑を映えて 街は一瞬沈黙の底に眠って人も通らない。

名産澁草焼の古い工芸品がウインドウの硝子の向うに特長ある濃い藍をならべ その藍のほのぼの匂う器の優美な肌ざわり。

土蔵づくりの酒屋の黒板塀のなかから洩れてくる 酒造る杜氏の若いひなびた酒造り唄 醗酵する新酒がブツブツと大きい桶の中で生育の唄を奏でている 庇に高く上げられた安定した杉の大きい玉 古い酒の琥珀の色がとろりと甘く流れる。

頬に降りかかる粉雪が少年のようになかぶった精神をしずめ 不逞な野望も瞋恚の炎も消してくれた この高山に居を構えて既に二十余年 半生の絆が日とともにしがらみのように縛ってきた 静かに余生が私を手招きしている。

雪はさらさらと蚕の舌が桑を噛むように静かに降っている 頬を伝う雪のとけた雫とびん髪の白くなりかけた頭をうずめて。

(31.2.4.)

五、左京町にて

左京町 左京町！

バス・ガールのアナウンスのように口ずさんでみる

その名の来歴も知らず なぜかこの呼名は

高山の町に似つかわしくほのぼのと心が温まる

北山公園の登り口 つまさぎ上りの赫土まじりの道

黒い板壁がだんだんと高く移行して振返ると町は広く見おろせる

緑濃い松や楓が塀の上に顔を覗かせている

両側に並んだ年を経た桜の枝々に
ましろく花をつける時季はその華かさのなかに
うらぶれて黄葉した寂寥の秋は愁いのなかに
時に東の空山脈の上を渡り鳥の群を見送ることもあった
私は月に一度この坂道を規則正しく登っていった
風景とまるつきり縁のない野暮な用件で
だがそれを語るまい せめてこの坂を登る時は
旅行者のように浮世のことも忘れていよう
ひぐらしが涼しい声で黄昏を告げる
町の屋根の上に加賀の白山が模糊として藍をひき
ひときわ明るく夕陽は沈もうとしている。

(31.9.1.)

薄暮幻想

四圍をめぐる山々が青ぐるく
乳色の水を含んだ空気が視野をぼかして
終焉の帷りを降してくる

涼々と澄んで流れる川岸に柳の古木が
緑のしたたる糸を川面まで垂れ
板を葺き石をのせた家並が逆さに映っている
黒ずみ落付いた幽邃の気配に
あたりを明るくじっと動かない白いつがいの家鴨

せせらぎはひたひたと心の塵を洗ってくれる

雑踏の街を歩いて来て

——それは私の半生の苦闘の頁であったかも知れない——

今こそこの静閑な夕べの敬虔な時秒に

神通川源流の山の街の橋上にたたずむと

越しかたの危なげな足どりと

生きる日の限り続くであろう苦難の道が

どっどつと濁流と化して叫喚しどよもし

橋上を溢れ 私は渦中にどつと押流される

血肉をわけた者への負担がいつも駆りたて

安住の境涯はいつ訪れるのであろうか

一瞬厳肅なる幻夢から醒めると

暮色のひとときわ濃くなった橋上に

屈託のない人達は幸せそうな顔で往来していた。

古都詩情

来たり迎える日々を 今日限りのいのちに思えて
どんなに悲しみの瞳で歩いたことか

敵めしい冬のあとに 若芽の萌える春が訪れてくるように
私達の日常に 平安な日々が還って来た

—— 大きないけにえの肉のうずきのあとに

私は乳房をまさぐる児のように

しばし明日に食べる食糧へのこだわりを捨て

古都の夕暮の道を歩いている

細く垂れた柳の枝の先々まで緑の芽は伸び
頬を撫でる川風は 薫風をはらんだ初夏を約束している
戦災に遭わなかったこの町の古い習俗と伝説を
平安な帷りのなかに今日も区切ろうとする。

山麓詩信

一、根方の峽谷にて

乗鞍の麓から流れる丹生川の水声がはるか底の方に聞えていた

蓬は太く緑に肥えて　その茎は水を含んだ綿のように耀いていた
きつとその露は人の世には求められない芳醇な甘味を醗酵させてい
るのであろう

山蟻は人煙のない叢のなかで営々と忙しげに登り下りしていた
堅雪ににぶく光る乗鞍　笠　槍ヶ嶽などの連峰が予期せぬ方向に

近くの山の間から雄姿をほの見させた

ひとり山に来て深山を恋わず
溪にきて清冽な水に憧れず

足りない日々の生活が凡愚のあさましさのなかに墮し
野猿のように峽谷の巖々を歩かせた。

(21.6.17.)

二、いなな毎魚の精

魅せられ魂をうばわれて思惟もなく

招くものに引きずられて谿に下りていった
笹魚釣る人でもたまさか下りてくる谿谷であらう
丹生川は涼々と深く千々にくだけ清くせせらぎ流れていた

岸辺の小石は天然の工たくみに滑らかに研がれ
種々の色彩と形で目を見はらせ

私はその一つを掴むと故もなく向う岸に投げつけた

人を厭うてきたのではなかったが
忘れていた精神が側々とよみがえり

人との仲に生きることがしきりに尊く思われてきた

叢の草は一年の間に幾人の人に見られるのか知れないのに
虚飾もなくみずみずしく細密画のように生きていた

山菜は既に背負袋にずっしりと満ち

私は人肌の匂いを懐しんで里に出てきた。

山峽詩篇

一、桑葚

油蟬がかずびすしく鳴いて山峽の山壁をこだました

ここに移居して元氣を取戻した少年たちはカバンを提げ

蟬時雨の声と溪流の音と青葉の隧道トシキルをかよつて帰ってきた

時には桑畠があると飛込み熟れた葎で唇を赤紫色に染め

山百合などが谷あいあいに咲いていると採つてはにおいをかいだりした。

(20.11.2.)

二、爐端

長い秋雨のつづいた後であった

裏の益田川がひととき水音たかく咳をした

風雨のはげしかったあとにはきまつて停電し部落は墨一色のなかに

さまよつた

十数戸の山峽の部落では炉端に明るく火を焚いて
親子の者はだまつてつかれた顔を火にほてらせた

石油の燃える音がジジと音をたて洋燈は細い三分芯の焰で四辺を明るくした

ものけでも襲ってくるようで子供たちは炉端に手をかざし深まった秋を静かに父の帰りを待っていた。

(20.11.2.)

三、山の駅

盛上るように橙色に彩られた紅葉の山峽を
あちらの沢やこちらの洞を汽笛がこだまして
山の駅をふるわせ汽車が白煙を吐いてやってくる

76

とおるように澄んだ大気に深くせまい穹

待合室で憩んでいると、傍らに置いてある

物入袋に入っているのであろうしめじ茸の香が匂っている

私自身が茸の香漂う深い山に入っているような錯覚を起して
しばし静かにその香のなかにとけこんでいた。

(21.1.16.)

四、山柿

山径にかかると急に樹木と土の匂いが鼻孔をくすぐってきた

橙色と紅を画布に塗りつぶしたように満山紅葉は今を盛りと燃えて

77

いた

部落の少年は独り長い竹竿で柿をおとして叢の中を這いまわっていた

急な径はしばらくのうちに山頂に高く私をたたせ

益田川の碧い流れを見降していた

冬籠りの屋根にかぶせる杉皮を背負いに山に登るのであるが

少年の時の遠足のようにこころ楽しく

生きている日を切実に

平和の還ってきた好日を思うのであった。

(20.11.)

山峽詩譜

冷い雨であったがさすが四月の春めいた、まだ発芽しない固い櫟林の上に、乳液を撒いたように煙っていた。山肌のくぼみには雪が残っていて、雪塊はしずかに身を削って溪川にとけ込んでいるのであろう。水墨画のなかを歩いて来てしめった身体。飛驒川の支流、阿多粕谷の水かさ増した瀬音は白く速くすぐ横に聞えた。昼の日中、満ちあふれる湯槽に身体をゆだねていると、ここがおもむろにくつろぎ和んで来て、しずかに目をつぶっている。私のおとのうのを知っていてわざわざ湯を焚いて待っていてくれた人達の心が、脈搏にふれて無韻のうちにそくそくと伝ってくる。榎火の煙るなかにむ

せび泣いておったのかも知れない、童児のように眼をこすって。病
のように、ひとびとの情けのみが今の私に生き甲斐を覚えさせる。

やがて深い山には斧がカンカンと原始の音を響かせ、一条の林道
から木炭を高く積んだトラックが車体をきしらせて降りてくるので
あろう、山は緑と共に新しい生産に入ってゆく。丁度樹々がみどり
増し潑刺と燃え上り新しい活動に入るように。雪が降って山や谷々
の名もない草や木の根元をうずめた夜半、灯を慕って野狐が農家の
大戸を覗くという。裏山の濃緑の樹間を栗鼠は軽快に跳ね廻り、溪
には山女やまのが銀鱗の斑点を泳がすという。俗情から遠い山峡の別天地。

人々からそそがれる情けの花粉が、行き詰った私の行路にいつも

打開の灯を点じる。いつでもそれには応えなければならぬと自戒
の鞭を自分にあてる。繁雑な省察に暇ない一日を劃然と裁断しては
るか山懐のなかに身を置き、ふかぶかと石のように感情を殺して沈
んでいた。

乗鞍の見える丘にて

遠い遠い昔、乗鞍がまだ火を噴いていた頃、押しながされて来た熔岩がその坂路を石畳のように敷いていた。すべる足もとにくつと力を加え、清麗な山気の満ちた路を登っていった。紅葉に染めかけた櫟林に風がわたり、葉がさやさやと鳴る。猿とりいばらの朱い実やばちりん、漆の赤い葉に今日の終焉を飾る落日が炎のように焦していた。送り迎えるほそぼそと跡絶えがちな蟋蟀の音、物の怪につかれたように早や露のおりた野菊や龍胆の花々を踏み、仕事のあいまいつも窓をあけて見上げているこの丘にきた。既にこの秋の新しい雪を頂きに六尺ばかり、白く、潔く、ひじり聖のように耀かせ、群がる山

々の上に裳裾を襲ふかく拵げている。一瞬思念は邪悪の世界を断ち、因襲を超え、世相の酷しさも忘れて、バラ色から薄い紫紺に変わってゆく山容を視野のなかに見護っていた。

——山王天じよう平にて——

(29.10.21.)

乗鞍岳

切り通しの名もない峠を登っていった
水を含んだ赤土の塊りがこぼれ落ち
その音に本能的にあたりを見廻わす
紅葉を染めかけ栗や檜の木立が生きているみたいにざわめいて
落日を背にうけ自分の影は長く尾を曳いていた

銀色に靡く芒の上を群がる山々を座に
初雪を頂きにほんのり粧って
乗鞍は安定した偉容で厳かに浮いている

人間の小さい自我から起る争いを――
人間の貪婪なあさましい所業を――
人間の悲しい宿命の願望を――
創生の日から乗鞍は超然と眺めていた
やがて山やまに囲まれた古風な町に
憩らいの灯が黠り人びとは静かに一日の回想の時をもつ
よこしまなるものが人びとから去ってゆく
失われたものを人びとは取戻す
正しいものが人びとの心に芽生えてくる

今乗鞍の頂きはバラ色に変化轉身し
遠い遙かな空に没しようとする
下界は静謐の夜を迎えようとする。

(26.秋)

秋 夜

月はまだあがらず仄暗い橋の上であつた
何か倒れこむようにバサッという音をきいて立止つた
水の中で何かうごめき遠い灯に川面が揺れていた
砂くさい匂いが裕を着ている肌に染み 夜が深かつた
しばらくの時を佇っていると
波をこぎいて陸に上つてきた者があつた
腰から下が濡れた夜網を打つ人であつた。

回想

わたくし達のつかれた脚を力づけてくれたのは
はるか彼方の下を流れている梓川の紺青の流れであった
いつか山吹峠をおりる時見た双六の溪に臨んで
心のふるえるのを感じたように
わたくしの胸にすがすがしいふくらみを与えてくれた

青葉のしたたる森と 小鳥たちの歌と 奥穂高の荒々しい岩肌をな
がめて

羊腸の路の安房峠をおりていった

あれから幾年 ひからびた回想のなかに浮かんでくる山と川と売店
の娘

名も知らず 顔もはや忘れはて ただ眸の澄んだその娘は

梓川を背に橋の傍らの売店に佇っていた

ゆきずりの旅びとのように言葉少なくその娘と語り

わたくしは一組の絵葉書と一本の白樺の洋杖を記念に買った。

(22.2.3.)

白萩の章

—又は老母に捧げる詩—

庭の萩も蕾を持ったよとおん母がのたまえば
すずろな緑の露をうけた萩の株は
きつと白萩であろうと ひとり心にきめてしまった

ここを退院する頃はそほそいうなじに白い花々をつけ
私は傍らに佇むであろう

生きる日の尊く 生きる日の寂しく すこやかな身体を一日もはや
くとりもどさねばならぬ

おん母の髪は霜をふくみ いまとおく子のために人の忌む病を看と

りに遙々と来たりたもう

三十五歳の子はおん母の傍でいつも幼く
粥などをあんとふくませて貰えば
不覚にも不考を詫びる涙が胸底に湧いてくる

今私は幼児のごとくおん母のそばで 亡くなった父の想い出話や

故里の人たちの榮枯盛衰の物語などをお国言葉できいていると

六十年の貧しいおん母の生計が不甲斐なく自分を責め

水いらずにおん母と二人 四畳半の病室にあればおん母の寝息やす

かれと 扇をもちて夜蚊などを払ってやる

既にこころすませば忍びよる秋の気配そくそくと
白萩はここに集える不俸なる人の世を知らず明日は白々と開花する
であらう。

(19.7.24.)

峠

雪の峠道を歩いていた

陽があたつてくると樹々の枝に積っていた雪が落ちかかってきた

父は馬櫓をひき米や味噌を運んだ

母は若く裾端折って信州の製糸より帰って来た

ずっと谿底深く小石を洗う音を聞き

山鳥の羽音に時折り驚かされた。

(29.3.1.)

豌豆

—貧しき妻へ—

豌豆の花が無限に白くほのぼのと、

あなたの貌のように、夕暮の畑に咲いている。

早咲きの花はすでに薄い莢をさがらせて、

透くように小さな子房に

下から上へと花期がすむと順次莢になってゆく正確な摂理、

今幼い感傷より脱して生きてゆく生命に、

少年のような驚異の目を見はっている。

丁度若かった私たちが、次々と産れでた子供たちを育てるのに、

趣味も娯楽もやめ、一本の鉄筆と取組んできた、過ぎしこの十五年、

子供たちの成長を楽しみに営々と働いてきた。

日々の営みが苦しければ、なおさら、

生活に闘わねばならなかった。

世の中の全部の人達から裏切られても、

わたくし自身時に劇しい人生の虚無の泥沼に沈溺する時があっても、

畑に咲いた蝶形花冠のういういしい白い花瓣と、

わたくし達の血をひいた四人の子供だけは、

きつとわたくしに、真実な世界の存在を示してくれよう。

人生

——長男啓輔に——

お前が二十五になったら父なる私は五十

その日が来たらお前の手に

煩わしい責任ある立場のこのバトンを渡そう

父は世俗の雑事に追われて半生を無為に過して来た

このまま死んでいったら私の生涯は無慈悲である

深い山の陽も射さない濕地に

長い年月積み重ねられた病葉の層の下を滾々と流れる真清水のよう

に

その年齢の来る日まで若々しい精神を

この体内に溢れさせ蔵って置こう

精神はいつも二十代の青年であって

五十から私の青春が明けそめるのだ

世間の常識が嘲笑うならば勝手に笑わせておこう

精神の片輪者ならば広い世間に

一人くらい居ても神は嘉するだろう

子供らと一緒に詩を作り

子供らと一緒にお茶をのんで

五十から初まる人生に愛も愁いもあることを忠実に記録しよう

真実を求めて書くことが生きた證であるように。

夕景感興

——第二子郁郎に——

すこやかに今日も生き

子供を負ぶってこの広場に立つ

内に去来するものを現わすことも日々にとく

凡俗の生活に溺れ流され

子供の生育が慰安となつて私でない私を育ててゆく

秋が山郷に巡つて来た頃

この広場に訪れた曲馬団が

賑やかな狂想曲を撒きちらして去つた

あれから二ヶ月、今その後には大麦の芽が

やわらかく二寸位に伸び

近く霜柱を立てる高原の冷えた大地に

山を吹降ろす冷風にそよいでつつましく生きている

父に早く逝かれ片親の愛情の懐ろに満たされぬものを感じた私は
幼き日を思えばこの二つの掌で強く締めて愛撫をつづけたい

ねんねころと子守唄を歌い

夕陽の沈む白山の山のつづきに見いる。

(14.10.20.)

掟

— 四人の子供たちに —

紙をひいた半透明の原紙に誤って書いた文字を切り貼って
焼き罫をあててつくろうそれに似て
つぎつぎの創痕を繕ってきた四十年
冷えた鑪にこごえる指で原紙の函に
文字を一字一字埋めてゆくかなしい習慣
自分の肩にいつも五つの口が穴をあけ
よそ見も許さず鞭をふられているように
たとい過去った月日よりも険しい明日が待っているにしろ

何物かに追われても生きてゆかねばならない
今宵山岳から吹きおろす雪もよいの風は
妻の丹精に芽を出した豌豆の緑をさいなみ
移し植えてようやく根付きかけた折菜の上に
冷え冷えとむごく打ちひしぎ
明朝は潔く白雪に彩られるであろう
童児たちよ 可愛い子供たちよ
風雪のきびしい砦を父と母は護るから
たとい配給の糯米は少なくとも
世にいじけず伸びのびと育っておくれ
やすらかに夢はらむ床に訪れる
賀春の慶びにやすらかに寝ておくれ。

卷末に

昭和十四年春より約二十年近い間に亘って新聞雑誌に発表した二百篇の中からこの詩集を編んでみた。一番脂の乗った飛躍すべき時代に於ける作品だと思ふと、自分ながら汗顔、羞しい気もするが、不具の児をもつ親の情にも似て、自分としては捨て難い愛著を感じるのである。この二十年は日本が敗戦へと未曾有の難局に遭遇したとともに私自身もまた言語に絶する世代のなかで過ぎねばならなかった。しかし、詩作するという一つの生き方は、こよなくこの人生に省察や思索を深くさせ、このために絶えず、自己流ではあるが人生観をもたせ、信念をもって生きてこられたことは望外の幸いと人知れず喜んでゐる。

この小著を起点として反省し、詩の技術や世間をみる目をより養ひ、与えら

れた爾後の人生を徹底させ、死ぬまで詩作の情熱を燃やしてゆきたいと思ふ。先輩知人大方の御批評と御叱正とを待つ次第である。

長い間絶えず詩上の御助言を下された平光さんが、今回この詩集の印刷を引受けて下さった友情を思うと、全く濟まなく、厚く感謝の意を捧げたいと思ふと共に、これまた雑誌「詩宴」を通じて庇護御指導下さった殿岡先生、並に高山市九月会同人の陰に陽に詩作への情熱をかきたてて下さった友情をこの機会に記して置きたい。尙、私事ではあるが、物質的に絶えず不安や困難を抱かせている日常にかかわらず、理解ある協力を示してくれた妻や子供たちにも深く感謝しておきたい。思えばこの小著の家族の者たちの合同著作である。

昭和三十三年一月三十日曇る日に

和仁市太郎

詩集 禁猟区にて 目次

私の詩	3
不惑の言葉	6
童話	8
古い沼	10
四十年	12
演技	14
白木蓮	16
黄蜂	18
柿の樹の下で	20

雑草の根	22
野鴨	25
秋の日に	26
夜景	28
千鳥	30
白蝶	33
孤独の座	34
春の日に	36
惜春譜	38
薄暮抄	40
夜の想い	42
夜学	44

卷末に	102
掟	100
夕景感興	98
人生	96
豌豆	94
峠	93
白萩の章	90
回想	88
秋夜	87
乗鞍岳	84
乗鞍の見える丘にて	82

伝承	46
春雨感興	48
五月の詩	50
禁猟区にて	52
玉蜀黍	54
立春大吉	56
高山詩抄	58
薄暮幻想	65
古都詩情	68
山麓詩信	70
山峡詩篇	74
山峡詩譜	79

著者小歴

一九一〇年飛騨国船津町に生る。詩集自家版「暮れゆく草原の想念」並に「石の独語」あり、昭和八年同人誌「山脈詩派」主宰発行、終戦後復刊通巻三十二輯を出して現在休刊中。富山市の「詩と民謡」の同人に推されて作品発表したことあり。一九四八年「詩宴」の同人となり現在に及ぶ。中部日本詩人連盟会員。

詩集 『禁猟区にて』 限定二七〇部

昭和三十三年四月二十日発行 頒価二五〇円

著者 高山市森下町一ノ三五 和仁市太郎

印刷者 岐阜市長森北一色 平光善久

発行者 岐阜市香取町一ノ一八 殿岡辰雄

発行所 岐阜市香取町一ノ一八 詩宴社
高山市森下町一ノ三五 山脈詩派社

